

古書のたのしみ（令和二年十月）

土屋 博

一「軍人文鑑 全」相澤富蔵著、依田百川批評、三村佐山校閲

（厚生堂蔵版、明治廿一年三版、定價金五拾錢、一六八頁）

古書價格五百圓也。日用文の例文以下の如し。「現役當籤を在隊の友人に報ず。略陳御海容。然れば小生儀何月何日之抽籤に於て現役に相當り候。未だ何所入營は不相知候へ共、御同様國家保護之兵員に相成候に付、不取敢御報申上候。入營の上自然拜顔之節茂有之候はゞ、貴殿は先入にて諸事御案内之儀に付宜敷御手引之程願上候。右御依頼旁御通知迄草々」と。以下、尺牘文、記事文、論説文、祝文、祭文、報告文、と續く。更に卷末には四二頁に亘る「尚武論」掲載せられ、以下の如く締め括らる。「嗚呼純乎たる帝政日本國と純乎たる民政合衆國と足附を合せて地球上に反立するは豈宇内の盛事にあらずや。豈以て萬國に高視するに足らずや。露英支は大なりと雖も何んぞ齒牙に掛くるに足らんや。嗚呼此の天授帝國を無窮に保全するは天授尚武の國民あるのみ。嗚呼我が大日本帝國三千八百萬の同胞諸君は深く注意猛省せられよ」と。

二「日本外史纂語字解 全四冊」鈴木音彦編纂

（三書堂蔵版、明治二十二年刊、五三丁十五三丁十五九丁十四九丁）

古書價格二千五百圓也。本書の類書に比しての特色は、凡例にもある如く、「註釋は極めて俗言卑語を用ゐたり。蓋し童蒙をして解得し易からしめんことを欲してなり」との點にあり。

三「日本全國小學生徒 筆戰場 第壹卷第壹冊より第三冊迄合本」

(博文館、明治二十四年刊、一〇四頁十一〇四頁十一〇〇頁)

古書價格八百圓也。博文館発行の「幼年雜誌」の號外として小學生徒に筆を自由に奮ふ場を提供するものなり。目次を見るに、論説之陣幕、記事之太鼓、雜文之彈丸、簡牘之旗章、懸賞之喇叭といふ構成なり。懸賞之喇叭の一等賞の冒頭に掲載せられたるは、静岡縣濱松尋常小學校生徒近藤和一君の作品「忠孝とは何ぞや」なり。曰く、「古語に曰く忠孝は國家の寶なりと。宜なる哉此言や。彼の平重盛、楠正行の如きは即忠孝両全の人にして幾千年を経るも諸人をして感賞措く能はざらしむ」云々と。二等賞東京府赤坂區小學校尋常第三年生吉村波満子さんの作品「日本三景の記」は、以下の通り。「皇國の三景と稱するは陸前の松島、丹後の天の橋立、安藝の嚴島是なり。松島は群島松を生じ、橋立は白沙青松長く海中に斗出す、嚴島は神社殿廊を海中に構造し、皆風光に富めるの地にして其名を全國に擅にせり。」と。三等賞岐阜縣美濃國可兒郡御嵩尋常小學校第四年生安東徳男君の作品「各自の志を告ぐる文」より、「以手紙申上候追々春暖に相成候處尊體愈御壯健奉大賀候。陳者私共は最早尋常科をも卒業致すべき身分に御座候故御互ひに後々の目的を相定めねばならず尊下は如何に候や奉伺候。小生は頃日の幼年雜誌にも有之候教へに従ひ成長の後は父上の家業を相継ぎ出精致すべき目的に御座候」云々と。

四「小國民文林 少年文集 全」

古書價格千圓也。「小國民」は石井研堂を編輯主幹とする當時を代表する兒童文學雜誌。文林はそこより派生せる作文専門雜誌。本書は明治二十五年より二十七年のもの

を含む合本なり。此処にも懸賞論文（鼠を捕る記）の披露ありて、たとへば、甲賞受賞（賞品は少年日本史一冊）は、千葉県夷隅郡布施村の永石徳松君の作品なり。その冒頭部分を掲ぐれば、「去年の十二月はかりなりき。或夜くりやの方にて物音のしけるに、ふとねさめて、何事にかと、頭もたけたれば、あやしう物になへるか如聞えけるに、こは盗のしのひ入りしなめりとかたへにいねし人を搖り起して、紙燭持せ、つはもの抜き持て、いてとて燭火さし出させつるに、物音はたえて人かけもみえさりしかは、いふかしくて残る隈なくさかし求めたるに」以下省略。乙賞受賞（賞品は鯨幾太郎一冊）は麴町區一番町の日下部善太郎君の作品にて、「我家嘗て數鼠あり。晝は累々として梁棟に跳躑し、夜は囁々として庖厨に鬪暴し、器物を噛み、食物を荒らし、子孫月に繁殖して、其聲喧聒、其状傲慢、害をなすこと尤も甚し。余大に之れを患ひ、隣嫗に請ふて一猫兒を得たり」云々と。

五「吉田松陰」帝國教育會編

（弘道館、明治四十二年刊、正價金六拾錢、一八九頁）

古書價格五百圓也。明治四十一年十月十七日に帝國教育會主催の下に開催せられたる松陰先生五十年記念の典の講演記録。豪華メンバーによる追頌演説は圧巻にて、およそ松陰の偉大さを短時間にて感得せしむ。乃木希典學習院長は、十六歳の年に玉木文之進より授けられたる「士規七則」を朗讀す。井上哲次郎文科大學教授は、松陰の言葉、「松下村塾の第一義は、閭里禮俗を一洗し、枕戈横槩の風を為す」を引用す。松陰と同年齡の三島毅（文學博士）は、齋藤拙堂の門下生のとき長州から訪ねて來たる松陰と近作を披露し合ひお互ひの實力を試したるエピソードを紹介す。東京高等師範學校長の嘉納治五郎は、今日の教育の弊として、智識の円満、各般のことを廣く能く知ることを求むる結果として、自分の利害を措いて仁義忠孝とか道の爲に盡さうとの精

神を養ふことが薄弱になれることを指摘し、今日の教育界に松陰の如き人物の精神を
注ぎ込むことの必要性を訴ふ。

六「ポケット福翁百話（附福翁百餘話）」

（時事新報社、明治四十四年六版、正價金壹圓、四一二頁十一〇四頁）

古書價格四百圓也。三方金、革表紙。全ルビ付き。初版は明治四十二年。原稿は、明
治二十九年三月より「時事新報」に連載せられたるものにして、文語の勉強にも最適
なりと覚ゆ。冒頭は以下の如し。「宇宙は誰れかに造られたるものか又は自然に出來た
るものかとは宗教論の喧しき所なれども其の論議は姑く擱き我輩に於ては唯今の宇宙
の其まゝを觀じて其美麗其廣大其構造の緻密微妙なる其約束の堅固不拔なるに感心す
るのみならず之れを思へば思ふほどいよいよますます際限なく唯獨り茫然として止む
のみ」と。

七「吉田松陰 附録松陰遺稿」碧瑠璃園著

（大鐙閣、大正九年縮刷十七版、定價金壹圓七拾錢、本文五八二頁十附録二二四頁）

古書價格五百圓也。縮刷初版は大正六年。碧瑠璃園へきるりゑんは黒頭巾など複數のペンネームを
有し、本名は渡邊勝。渡邊霞亭として名高し。一八六四年生れ、一九二六年歿。

八「新編世界史年表」妻木忠太著

（有朋堂、大正十二年改訂五版、正價金壹圓、本文二一六頁十附録）

古書價格五百圓也。初版は大正九年。一頁の上段日本の欄の神代には、伊弉諾尊と伊弉冉尊との二神は淡路の小島に降りて大八洲を成し給ふとあり。中段東洋の欄には、漢人種は凡そ五千年前に遠く支那の西北方より來りて黄河の流域地方に據るとあり。下段西洋の欄には、西洋文明の起源は今より五千年前に於て東方ナイル河流域とチグリス・エウフラテス両河流域との各地方より開始すとあり。

九「受験準備 最も要領を得たる東洋歴史」諏訪徳太郎著

（大修館、昭和二年改訂第二十四版、定價金壹圓四拾錢、本文二二六頁十附録）

古書價格四百圓也。著者は京都府立二中教諭。目次は、上古史、中古史、近古史、近世史、現代史。附録目次は、試験によく出る歴史上の諸名詞、総括的問題及び解答など。東京高等師範の問題例、「漢人種の起源と發達に就きて記せ。」

十「國文解釋新講座」鳥越保太著

（教文書院、昭和四年改訂第十三版、正價壹圓七拾錢、四五四頁）

古書價格四百圓也。初版は大正十五年。東京高等師範の問題より、賀茂真淵集「あしたのけにあきて、夕のまけをなさず、けふの命を惜みて、明の死を思ひまうけぬ鳥獸の、なかなか古今とかはる世なきを見れば、かしこめきたる人ぞ鳥獸には劣れりける」。その譯は以下の如し。「朝の食餌を腹一杯食つてもう夕食の用意をしない。今日の目前の命を惜んで、明の死を豫めかんがへない鳥獸が、却つて古から今日までかはる事がないのを見れば、さも利巧相に見えてゐる人間の方が劣つてゐるわい」と。

十一「大日本文庫國史篇 日本書紀」

(春陽堂、昭和九年刊、非賣品、五九九頁)

古書價格三百圓也。全ルビ附きにて重く立派なる製本にして活字も讀み易きものなれば、このシリーズは購入すべしと覺ゆ。しかも平泉澄氏の校訂及び十四頁に互る解題は貴重。氏曰く、「日本書紀は國史の根本として我が國に於ける最も重要な書物なり。天地開闢の古傳、國家草創の由來はこの書により率直に示され、國體の特性、皇室の尊嚴はこの書により確實に知らる。これ實に日本精神闡明の秘鍵、日本人必讀の書なり」と。ちなみに、今年は日本書紀成立百參拾周年の記念すべき年なり。

十二「大日本文庫國史篇 日本外史 上下」

(春陽堂、昭和十一及び十三年刊、非賣品、五二四頁十五三八頁)

古書價格二冊にて五百圓也。全ルビ附き。平泉澄氏の校訂及び解題は必讀の價值あり。氏曰く、日本外史は、よく國體の本義に立脚して數百年に互る武家時代亂脈の時代を批判し、極りなき紛糾をさばき重疊の波瀾を描寫し、讀む者をして感奮興起せしめたり、と。

十三「國譯漢文大成 國譯四書・孝經」

(國民文庫刊行會、昭和十八年八卷、定價金五圓十特別行為稅相當額拾參錢、大學四九頁十中庸九六頁十論語三三六頁十孟子三六三頁十孝經三二二頁)

古書價格三百圓也。初版は大正十一年。全ルビ附き。大學・中庸の譯註者は小牧昌業、論語・孟子の譯註は服部宇之吉、孝經の譯註者は山口察常なり。

十四 「吟詠集」 瓜生田君子編輯

（香雲堂吟詠會本部、昭和二十八年三版、四二〇頁）

古書價格五百圓也。初版は昭和十三年。同郷の徳富蘇峰の題字（一吟雙淚流）及び序詩（君見ずや神州男兒臣通武・・・）を冠す。冒頭は七言絶句の菅原道真作「重陽後一日」なり。

十五 ワイド版岩波文庫「摘録断腸亭日乗 上下」永井荷風著、磯田光一編

（岩波書店、平成三年刊）

古書價格四百圓也。状態良き格安品を見つけたり。文語作文の手本とすべし。

十六 復刻「日本百人一詩帖」松井如流書

（東京書道會、平成十年復刻）

古書價格三百圓也。原著（昭和十九年刊）も所有すれど、美しき復刻本なれば、躊躇無く購入す。もともとは土屋竹雨著「日本百人一首」（砂子屋書房、昭和十八年刊）にて選定せられたる日本漢詩百首を松井如流（書家、大東文化大學名譽教授。一九〇〇年生れ、一九八八年歿）の墨書したるものなり。なほ、手許には別の書家、林祖洞による「日本百人一詩帖」（碧山堂、昭和十八年刊）もあり。

十七 「野村胡堂・あらえびす 來簡集 明治・大正・昭和を彩る交友録」

(岩手県紫波町発行、野村胡堂・あらえびす記念館編纂、平成十六年印刷、非賣品)

古書價格三千五百圓也。野村胡堂は明治十五年(一八八二年)岩手県志波郡出身。盛岡中學、旧制第一高等學校を卒業後、東京帝國大學法科大學に入學す。父の事業の失敗及び逝去により大學を中退し、報知新聞政治部の記者となる。調査部長・學藝部長となり、「あらえびす」のペンネームにて音楽記事も連載。作家となり、文藝春秋社のオール讀物に「錢形平次捕物控」を連載し、人気作家となる。本書は、松田家(胡堂の娘が經濟學者松田智雄に嫁ぎたることに因る。)及び野村家より記念館に寄贈せられたる胡堂宛ての書簡二〇七八通のうち二三八通を収録す。友人石川啄木(一八八六年生れ)よりの一九〇一年の手紙の冒頭は以下の如し。「昼の間のむし暑きにも似ず夕暮の哀れにも細々しき蟲の音の早や秋知り顔なるになにとなふ独り山寺にこもり居ることの物寂しき心地になり候」云々と。友人芦田均(一八八七年生れ)よりの明治四十年の手紙より、「秋立つや、ドテラに近き・・・まさかこんな句はあるまじけれど、此の秋の日を目白に籠りて誰をか待ち給ふ。病い誠不粹なるものに存候よ。」と。友人金田一京助(一八八二年生れ)よりの昭和十年の手紙より、「御高著御恵みに預かり大喜びです。今家ぢゆうが試験ですけれど少しづゝ、私が朗讀をはじめて居ります。」と。

(令和二年十一月十日受附)